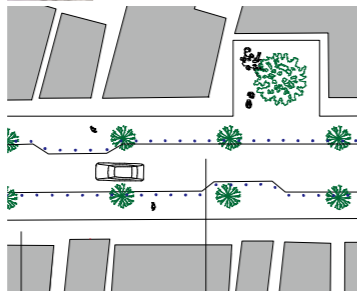


I. 早稲田通り

■空間的ひろがり



街並み誘導型地区計画は、建物の壁面位置を指定する代わりに、容積等を緩和する仕組み。この制度を早稲田通り沿いに線的に設定し、かつ優良建築物等整備事業を活用した小規模な任意再開発を促進する。これにより、建て詰まった印象を和らげるだけでなく、床高や面積の大きな高級的な路面店から、小規模で個性的な店舗まで、沿道建築物の規模や形状、用途が多様となり、歩いて楽しい街路が段階的に形成される。街路は歩車道のレベル差をなくし、ポンエルフを用いて交通の静音化を図る。フェンスを取り外しポラードとすることが可能となり、歩行者の移動が容易となる。建物と街路の両面から歩きやすさを追求し、通りとしての価値を向上させる。

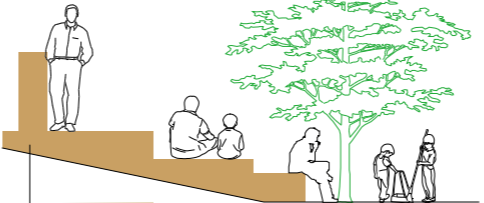


2mセットバック
現状、歩道部分は2m程度であるが、特に駅周辺の商業ゾーンでは狭く感じる。地区計画により2mのセットバックに協力してもらい、みちの心理的閉塞感を緩和する。

コミュニティ道路化
飯田橋から靖国通りまでの早稲田通りをコミュニティ・ゾーンとして再整備。速度超過で走り去る車もいる現状から、ゆっくり走らざるを得ない歩行者優先の道づくりへ。

■点在するちいさな広場ネットワーク

地区計画にて広場の位置を定めることで恒常的な空地を確保すると共に、地区計画内の任意再開発におけるインセンティブのメニューとして空地確保を定める。特に、前者の空地は隣り合った空地どうしの視認性を確保するように配置することで、早稲田通りでの歩行者の移動が誘導される。空地に関するデザインガイドラインを定め、二つの手法によって生まれた空地には統一性が付与されつつも、地形や立地を生かしたデザインとなるよう誘導する。例えば高低差の存在する広場は傾斜を活用した段差を設ける。段差の高さを想定されるアクティビティごとにモジュールとして設定することで、ファニチャ（ダンダン）としての統一感を得るとともに、通り沿いに多様なアクティビティが生まれる。



だんだん広場モジュール
互いに視認性のある場所に位置するだんだん広場の4つは、高低差に富むエリアであるため、それぞれの場所にあわせて段差形式のダンダンモジュールを設置。座ったり、横になったり、登ったり。ちょっとしたカウンターにもなる。

落ち葉掃き
広場にはそれぞれ必ず、高木や低木、草花などを植える。ほうっておかれるとすぐ葉や雑草で覆われるからこそ、地域組織や住民により日常的な交流拠点のひとつとして落ち葉掃きが行われるとともに、幼児教育の一助ともなりうる。

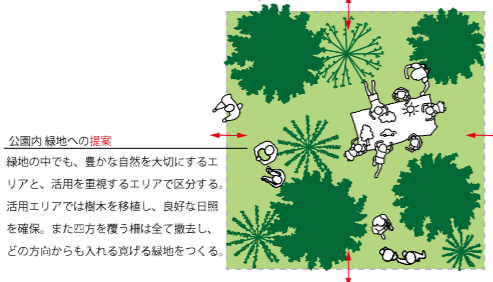
III. 北の丸公園 内部

■たたずむ縁側と開放感



公園内緑地の現状
北の丸公園は、公園として開放以来、豊かな緑地として現在まで成長してきている。一方で生い茂りすぎた木はせつかくの公園内を暗くし、さらに一部エリアには足元に柵が設置され、緑地の活用を妨げている。

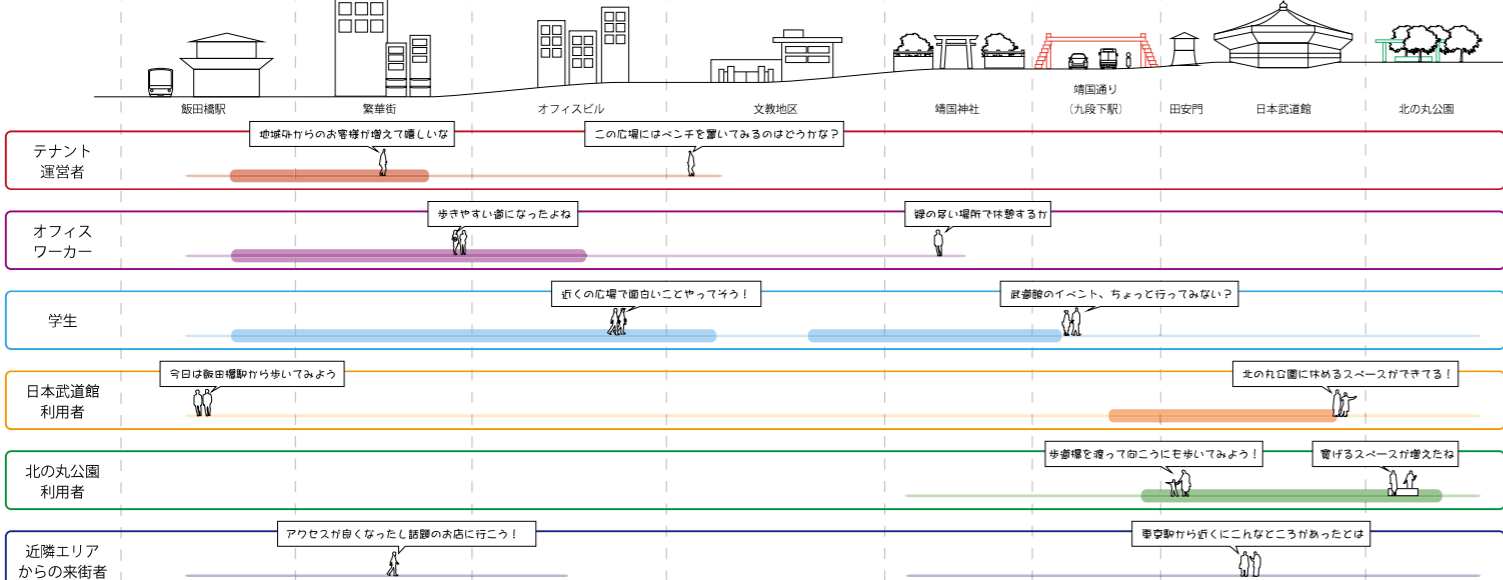
北の丸公園には、イベントのために武道館を目的として来た非日常の利用層と、犬の散歩客や子連れなど、周辺に居住してしばしば来訪する日常の利用層が存在する。両者が共存し滞留できる空間を、武道館から街路に沿って線的に配置する。武道館近くではイベント利用者の一時的な待機場所として、そこから遠ざかるに従って日常的な利用者の憩いの場所として利用される。縁側の持つ開放的なデザインが、利用者どうしの緩やかな交流を生むことが想定できる。また、東京オリンピック・パラリンピックに合わせて利用者の増加が予想されるため、周辺の立ち入り制限されている緑地を、一部立ち入り可能な広場とし、視線の抜けを確保し日照が向上するよう整備を行い、公園としての価値を高める。



公園内緑地への提案
緑地の中でも、豊かな自然を大切にしたいエリアと、活用を重視するエリアで区分する。活用エリアでは樹木を移植し、良好な日照を確保。また四方を覆う柵は全て撤去し、どの方向からも入れる高低差の緑地をつくる。

VI. 広がっていく行動の重なり

対象地域は地元住民や通勤・通学者のみならず、施設ごとに多様な利用者が訪れる。しかしながら、現状では目的としているエリアのみで行動が完結していた（図の太線の範囲）。計画によって、利用者ごとに限定されていた行動範囲が広がり、利用者同士の重なりを見せていく（図の細線の範囲）。新たな来街者も登場し、多様な使い方が早稲田通りに広がっていく。

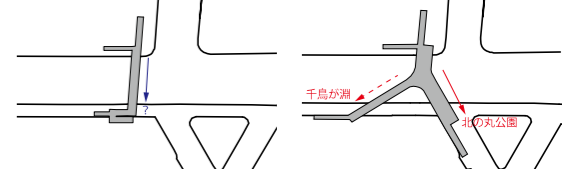


II. 靖国通り

■エリア結節点のリデザイン

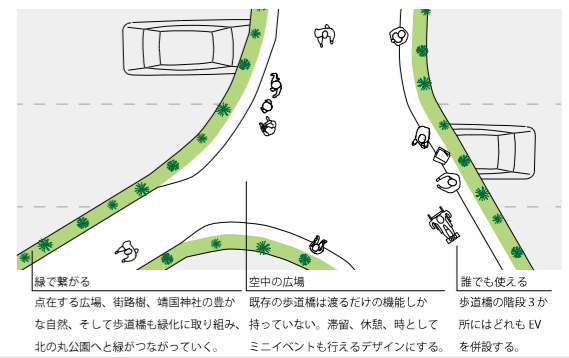


日本にはもともと広場という場所は存在せず、街なかの十字路である辻を仮設的に広場化することで、その機能が担保され、刹那的賑わいが生まれていた。早稲田通りと靖国通りという二つの軸の交わるこの地において、辻の再解釈により空中にリデザインされた歩道橋を提案する。田安門前を含む3つの地点と接続し、北の丸公園への流入を容易にする。幅員を広げることで、通路としての開放性を上げるだけでなく、橋上を滞留の場所としても認識でき、東京スカイツリーなどを眺める視点場として機能し、一つの目的地として存在感を持つ。また、橋の方向を田安門に向けることで、その先にある北の丸公園までを望めるような視線の抜けを作り、公園への期待感を高める。



歩道橋 現状
現在、歩道橋上で立ち止まり、靖国通りの風景を楽しむ人も見られる一方で、その軸線方向はよく考えられていない。この靖国神社前の歩道橋は、早稲田通りと北の丸公園をつなぐ重要な結節点であり、回遊性向上に大きく関連する。提案として、メイン軸線の北の丸公園方向と、千鳥ヶ淵の2方向へ緩やかに軸線をつなぐ。

歩道橋 提案



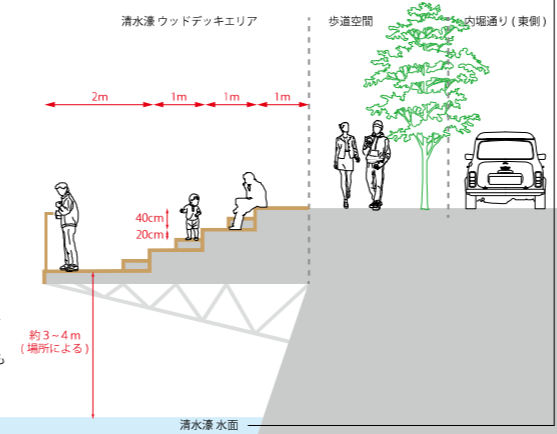
緑で繋がる
点在する広場、街路樹、靖国神社の豊かな自然、そして歩道橋も緑化に取り組み、ミニイベントも実行するデザインにする。

空中の広場
既存の歩道橋は渡るだけの機能しか持っていない。滞留、休憩、時としてイベントも実行するデザインにする。

誰でも使える
歩道橋の階段3か所はどれもEVを併設する。

IV. 北の丸公園 外周

■清水濠ウッドデッキ



清水門周辺の街路の歩道部分は幅員が狭く、歩行者がすれ違うにも苦労するほどである。この課題を解決し、湧き水に由来する清水門という名にふさわしい、街路及び親水空間としてデザインする。淵側にある植栽は全て道路側に移植し、自動車と視覚的分離を図るとともに、水面への視線の抜けを確保する。淵側のフェンスも取り外し、外堀方向に片持ち梁によって支えられたウッドデッキを張り出す。ウッドデッキは滞留、水面への接近への両者を誘発できるよう、二種類の高さの段差を用意。これにより街路と外堀の境界から水平に6m、水面方向へ近づくことを可能にし、外堀の中で最も水面に近づく親水エリアとして、北の丸公園の主要な名所となり、回遊性を向上させる。

現在、皇居や北の丸公園の堀は、水質悪化が進み、溢が大量に発生している。これに対し、三菱地所は浄化槽稼働を行うとして既に大型貯留槽や高速浄化施設を整備しており、今後に向けて北の丸公園も早急に回遊性向上に合わせ、親水空間の整備を行うべきであると考えている。

V. ソフト面でのデザイン

■シャトルバスの広域連携



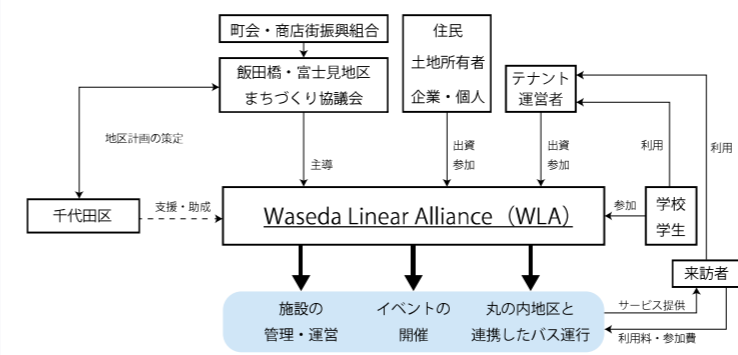
丸別
● : 既存バス停留所
● : 既存バスルート
● : 新設バス停留所 (3ヶ所)
● : 新設バスルート

現在丸の内地区などで運行されている「丸の内シャトル」を、北の丸エリアまで延長運行する。丸の内シャトルは周辺企業の協賛によって無料で運行されており、丸の内を利用する人の足となっている。丸の内シャトルは毎年桜の時期には千鳥ヶ淵周辺まで延長運行されており、かつては東京国立近代美術館へ運行されたこともある。東京国立近代美術館や丸の内シャトルまでの延長運行路線を常設することで、東京駅や丸の内エリアからの集客を担う。周辺のまちづくり協議会などで構成される新たな地域組織となる「Waseda Linear Alliance」が北の丸エリアの窓口を担い、九段下や竹橋周辺の企業からも出資を募ることでバス台数の増加、運行規模の拡大を図る。また、観光やビジネスのみならず、地域内にはない路線バスの代役として、地域住民の新たな足となる。

北の丸スクエアバス停は都営バス「九段下」バス停に併設、東京国立近代美術館と千代田区役所のバス停は施設内に置くことで、初期費用を抑えつつ利便性を担保する。

VII. 事業スキーム

■マネジメント



現在ある「飯田橋・富士見地区まちづくり協議会」を主導とし、住民や企業、テナントなどからの出資により「Waseda Linear Alliance」(WLA) を設立する。WLAには出資者だけでなく、近隣住民や学生など、その地に関連のある人ならば誰でも参加を可能とする。WLAは主に千代田区が担うハード面の事業の管理や運営、他地域と連携したソフト面の事業を行う。出資金の他に区からの助成金やイベントの参加費などを収入源とし、事業費に補填する。来訪者の増加により地域経済の持続的な循環を図る。初期は行政からの支援を受けるが、ハード面の事業完了後、独立した運営を目指し、最終的には民間団体として地域活性化に寄与していく。

■計画フロー

